

オアシス新聞

第7号

見上げれば夜空を照らす月あり

形を変えながらも一年を通していつでも見えることができて月。月は地球にもっとも近い天体で、もっとも身近な宇宙です。

その昔月は人々の生活にとって重要な働きがあり、一年のサイクルは月の満ち欠けによって決められる太陰暦でした。月が太陽の真裏に位置し、まったく見えない「新月」から、満月を経て再びほとんど見えなくなる「三十日(みそかづき)」「までをひと月」とし、その間は約29.5日なので、現在の太陽暦とはずれがありました。太陽暦が日本で採用されたのは明治に入ってからで、明治5年12月3日を明治6年1月1日として開始されたそうなので、当時の人はさぞ面食らったことでしょう。

このように月の満ち欠けで農作業や催事が行われていたので、昔の人々はわずかな形の違いにもそれぞれ呼び名をつけて、月を愛していました。現代ではせいぜい満月、三日月の呼び名を使うくらいで、秋になると今年の十五夜はいつだったか?と気になる程度になってしまいました。

また、現代は電気が発達し、街灯や室内の照明器具によって夜間でも日中と同じように活動が出来るようになりました。電気が発達する以前は、夜になるとろうそくや薪など、火の力で明かりを求めていました。それなので自然の力で手元や足元を明るく照らしてくれる月の光は、なによりも重用でありがたいものだったことでしょう。

秋や冬になるといついっせいに寒くて背中をまるめ、下を向いて歩きがちですが、キンと澄み切った空に浮かぶ凜としたたたずまいの月の姿を、改めて眺めてみてはいかがでしょうか。

